優秀
第一部

「あ・か・さ・た・な」で大学に行く

東京都

天

大

輔

足り自由に動きませんが、耳は聞こえ、意識ははっきりしています。私は彼と似た状態で日々生きています。

潜入服は蝶の夢を見という映画をご覧になったことはありませか？主人公は言葉は出す、手
私は十四歳のとき、体調を崩して病院に運ばれ、医療ミスにより心肺停止になりました。そのとき、医療担当者がその状態に気付かず二十分放置されたことで、脳の運動機能に大きなダメージが残りました。そのため四肢マヒ、言語障害、視覚障害が現れ、自力ではまったく動くことができなくなった状態になってしまいました。ạngで一日の多くの時間を車いすで生活しており、二十四時間見守り介助が必要な状態です。

視覚に現れた障害は、立体や色、人の顔は何とか認識できますが、文字の認識がほとんどできないという世界的にも非常に稀な症状です。紙面やパソコンの画面など、平面のものは大変見えにくく、本を読むことが全くできません。そのため、学習においては、聴覚で情報を得て、頭にインプットして記憶しています。

言語障害に関しては、発語がほとんど不可能です。コミュニケーションは、介助者に自分自身の手を引いてもらいながら、言葉の一文字を確認していく方法で行うので、アウトプットにかなりの時間を要してしまいます。例えば、「る」をお願いしたい時は、介助者の「あ、か、さ、た、な、ら、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る」のタイミングで私が手を引くというように、一文字ずつ文字をひろい、それをつなげて文章に連れていきます。
考えていることを相手に理解してもらえることが何々あります。

「あ・か・さ・た・な」のコミュニケーションの獲得

私は事故に遭った当初、医者から「この先ずっと植物状態が続き、知的レベルも幼児段階まで低下している」と診断されました。母は、医者から知的レベルが下がっていると断言していましたが、母は私に声をかけ取っていたのだと思います。母は、「コミュニケーションを絶対に取れるはずだ」と信じ続けてくれました。

私は気管切開をしていたため、約半年間、声を出せず寝たきりの状態でした。声に私は一生懸命応えようとしていましたが、全く動かない自分の体に、悔しさとやるせない気持ちがあふれ、よく一人で泣いていました。私は、うつろな目をしながらも周りの人間に対し、Yes・NOのサインを送ろうと試みるのです。看護師は私に「何よりも寒いの？」と聞いてくることがありました。例えば、暑くて暑くて堪らない状態で、なぜように動いてくれず、誤解されることが多々ありました。例えば、暑くて暑くて堪らない状態で、看護師は私のサインをYesだと受け取り、ますます布団をかけてしまいました。コミュニケーションは、自分の思いが伝わらないことも辛いです。相手に誤解され盛り上がりました。
ある時、私は自分の枕元に「い・ろ・は・に・ほ・へ・と……」と刺繍されている手ぬぐいが掛けてある夢を見ました。どうしてコミュニケーションを取りたかった私は、この文字列を使ってどうにか人とコミュニケーションは取れないものだろうか。夢の中で真剣に考えていたことを今でも覚えています。夢から覚めた後、五十音を誰かに言うと聞かされば、きっと言いたいことば通じるはずだと言いついたのが五十音を一音一字確認していくコミュニケーション方法だったのです。母は、自分に思いついたが五十音を一音一字確認していくコミュニケーション方法だったのです。五十音の表を頭の中で思い浮かべて、大輔、聞こえていた五十音の表を頭の中で思い浮かべて、お互いに話しかけ始めました。私は、「時間以上かけ舌をわずかに出すというサインで「へ・つ・た」という三文字に反応しました。今のは、もしかして減ったってことなのか？」「た・つ・へ」
新たな光へ

退院後は、肢体不自由養護学校（現・特別支援学校）へ転校しました。入れられたクラスは、知的障害も持ち合わせている重複障害のクラスで、コミュニケーションがほとんど取れない生徒ばかりでした。そのため授業内容は、何か物を作ったりする作業中心のもので、教科書は使用せず、教科教育はほとんど行われませんでした。障害者になってからの一年間、自分の障害をなかなか受け入れられず、元気だったときの友達と会うことも、外出することも極力避けていました。そんな中、私に訪れた転機は、高校二年ときに扱っていた先生との出会いです。その先生は、
ああしろ、こうしろ"などとは決して言わず、また、やさしい言葉をかけるのでもなく、自らの行
動で私を導いてくれました。たとえば、学校の倉庫に眠っていた電動車いすを、私のために改造して
くれ、私は校内を自由に動き回れるようになりました。また、一つのスイッチしか操作できない私で
も、ひとりでワープロ操作が可能なようにソフトをプログラミングしてくれたのです。私に様々な可能
性があることを具体的な形で示してくれました。その後、この体のままでは将来をどうするかということも考え始め、その結果大学進
むことを真剣に考えるようにになりました。しかし、学校側に大学進学の希望を伝えようと、ある先生か
らは
大学進学なんて夢みたいないなと考えるな。お前はどうやって生きていけるか現実をちゃんと見ろ。
通った肢体不自由養護学校では、高等部卒業後、生徒が大学進学するということを全く考えてい
なかった。養護学校には、受験高校コーデを確認しようと思っても、知っている人はいないのだから仕方がないのかかもしれない。
そこで、両親とボランティアの仲間に受験についての情報を集めました。全国障害学生支援センター
（前身の「わかこま自立生活情報室」）に赴き、いろいろ相談にのってもらいました。しかし自分の障
障害者の大学受験

私は二〇〇四年春にルーテル学院大学に入学しました。養護学校的高等部を卒業したのは二〇〇〇年

この四年間、私は、受験させてもらうために文部科学省や全国の私立大学に、数多く交渉をしてきた

私に受験を希望している大学に障害者の入学前例がないことや、障害の程度が重すぎることを理由に、

文部科学省や大学との交渉が難航する中、受験勉強も並行してやらなければならなくなりました。センター試験についても、私のような重度の障害者がセンター試験を受けられるようになるためには五年（十年の歳月が必要だ）と文部科学省の役人から言われてし

てくる音声情報による受験勉強のため、勉強内容は英語を中心にしていました。しかし、受験校を増やすために日本史の勉強をすることにしました。試験で四択問題がある大学を選んだり、過去問題をやってみましたが。すると、見なけらば答えられない問題など、私にとっては捨て間

― 39 ―
問題が二つ三割あり、残りの七〜八割を確実に取らなければ合格ラインに達しません。
受験を申し込んでも、ほとんどの大学に断られる中、辛うじて受験させてくれた大学もあります。
しかし、試験問題や受験方法、受験時間を何の配慮もなされていないところがほとんどで、初めてから
中でもルーテル学院大学だけは理解を示してくれました。配慮について、学校側と何度も相談
し、受験当日は問題を読む先生と、私の回答を聞いて記入する先生をつけてくれました。しかし、ルーセンス
受験に挑戦するも失敗。その後一年間は、大学の様子を知るため、大学に通えることをアピールし、二度目の受験の際には、
知ってもらうために聴講生として千葉から大学のある三鷹まで、片道三時間、車に揺れて通ってい
ました。こうして、体力的にも大学に通えることをアピールし、二度目の受験の際には、倍率が低く
卒業までに六年間かけることができる神学科への入学を大学側から勧められ、受験をしました。福祉
科は四年間で、その課程には社会福祉の実習も組まれているのですが、それが無理だろうと判断され
たことも、その理由の一つです。
受験内容は英語と面接。英語の受験の際には、試験問題を読む担当と、私の回答を聞いて記入する
担当の人が必要でした。また面接試験は、一般入試に予定されていた集団面接ではなく、個人面接に
してもらい、介助に慣れている父についても受験をしました。試験時間については普通の試験
時間が二倍長長してもらったが、それでも足りませんでした。もし小論文の試験があったなら、

四年目でようやく受験には無事合格することができました。入学が決まったことは嬉しかったので、

大学に進学するための一瞬の壁は入試だと考えていたので、それを受けてクールに大学を

受験しました。入学後一年間は神学科に在籍していましたが、神学科に通いながら福祉科の授業を受

け、二年生から社会福祉学科に転科しました。

たくさんの仲間に支えられた大学生活

事・トイレの介助、学校の近くに引っ越してきてからの通学介助など、多く介助を必要としました。他に、プリントや教科書を読み上げてもらうなんて絶対に行いませんし、レポートやテストも提出しない。
なければなりません。そうした問題をどうクリアしていくかが、入学にあたっての最初の課題でした。

入学決定後は、大学側から、三鷹にある「障害者地域自立生活支援センターぼっぷ」を紹介してもらい、そこでハローパーの登録をしていたルーテルの学生と出会いました。その学生と、それまで受験勉強などサポートをしてくる千葉大学の学生を中心に、ボランティア募集のためにチラシを作成し、配布したり、新入生のオリエンテーションで呼びかけや授業の会合に説明会を行うなどしました。

養護学校時代では障害者に対して周囲の配慮があることが当然でした。健常者に閉まれた環境に入っていることを、自らの障害の重さを痛感しました。例えば、飲み会にいけ、そこで食べたり飲んだりするのも深く深く考えさせられました。一年生の初めの頃、授業は千葉大の学生がノートテイクを担当してくれましたが、ルーテルの学生によるボランティアが少数ずつ集まってからは、ルーテルの学生だけを回せるように引き続きしていきました。また、私の介助は一人できるようになるために、何度も関わりを持ち、練習する必要がありました。それ故、大学生活全体のことを思い返してみると、障害を持つ学生も年々増加しており、サポートの必要性も高まっていったと感じます。

大学二年生の終わり頃、私は「もし大学に障害を支える組織があれば、多くの障害学生が
生生活を送りやすくなるのでは？と考えるようになり、他の大学の障害学生支援組織と交流の機会を持ちながら情報交換をしていきました。他大学のシステムを参考にしながら、障害学生のサポート組織「ルーテルサポートサービス」通称LSSを作り、私が三年生になる四月より活動を開始しました。LSSの活動で苦労していることは、介助者に男性が少ないことです。これは、福祉を学ぶ学生に男性が少ないことが影響していると思います。また、誰に介助についてもらうかなど、シフトの組み立てや、調整にも時間がかかることが苦労したところです。一年生の時期まで、「千葉から片道三時間か五時間かけて学校に通っていきましたが、一年生の後期が始まる頃には、学校の近くに引っ越し、現在は友人と共に通学しています。

今は、通学や授業などはLSSの介助を利用し、その他、外出したりする際には、重度訪問介護従業者の資格を持つ友人に、ヘルパーとしてついてもらっており、学校内ではボランティアという形でサポートしてもらっています。
「あ・か・さ・た・な」は心のコミュニケーション。

私が大学生活で学んだことは、自分が何を学ぶべきかを明確にしたのではなく、他人とのコミュニケーションを通じて学んだことである。日々の生活の中で、人と人とのコミュニケーションが重要であって、それが大学生活で学んだことの一部である。
話し言葉は、話している人の話し方や声の調子、語尾、話の流れの前後関係などで言葉のニュアンスは微妙に変わってしまいます。私の会話は、単語を超ぎ合わせることで文章を作っていくため、微妙なニュアンスをうまく相手に伝えることができないので、私にとって大変辛せなことです。

私が友人と、「あ・か・さ・た・な」で会話をしていると、よく人が集まっています。私の手を引っ張りながら話している様子が、周りの人たちにとって、とても不思議に見えるようなのです。私たちのやり取りは興味を持った人と、私を積極的に関わろうと心がけています。最初は不思議そうな顔をして緊張しながら、私たちの会話を読み取るためには、本当に聞き気がいります。私は自信を持って言葉でしか伝えることができません。しかし、聞いてくれる相手も、私の少ない言葉で、うますく言葉をはかって来た瞬間は、とても心地良いものです。
私は四年間の大学生活で、たとえ言葉の数が少なくても、人との会話をうまく続けました。相手のことをわかり、気持ちは伝えられ、言葉の数が少なくても（たとえ言葉を持たなくても）人と人は、通じ合えると私は思います。大学生活で多くの仲間とそんな心のやり取りができたことは、私はとっただけがえのない経験となりました。それは、ルーテル学院大学で一〇〇人以上の学生と私が、この心のコミュニケーションをとっていこうだと思っています。

今年の九月、私は四年半過ごした大学を卒業しますが、これから社会に出てもたくさんの人々と、あなたもしませんか。私は「あ・か・さ・た・な」のコミュニケーションをとっていくことの証明をも言えます。
昭和五十六年生まれ
学生
東京都武蔵野市在住

「受賞のことば」

私は以前、柳田邦男氏の『犠牲（サクリファイス）』を読み、聞き、深く感銘を受け
ました。死の淵から生還した私も、いままでの自分史を書き留め、今何を感じ、どう生
活しているかを表現してみたい。そして私のコミュニケーション方法にひとりでも多く
の方が関心を持ってもらえればという思いで、今回この「NHK障害福祉賞」に応募し
た全ての方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

この場をお借りして、母をはじめ、今までに私とコミュニケーションを取って下さ
った皆内に心から感謝いたします。《人間って凄い！》という感動が高揚してきました。

天竜様は、医学の通念を突き破って、意思を伝える独自のコトバ表出法を獲得し、さ
らに教育の壁を突き破って大学に進学。そして、天竜様の時間のかかる断片的なコト
バの表出と、そのコトバの奥にある思いを懸命にわからずとする学生たちのひたむきさ。

心をつなぐコミュニケーションとは何か、その神髄がここにあると感じました。

脳障害後の知的不可能性を否定する医師に呑まれずに、ひたすらの子の可能性を信じ
て、天竜様のコトバ表出の道を探った母の愛も凄い。この愛と汗と友情の贅沢と言うべ
き手記は、人間が生きるには、自己表現の手段を持つことと他者の愛の存在の支えが、いか
に必要かということを語っています。広く少年少女に、若者たちに、読んでほしい。

（柳田
邦男）